

海外史跡踏査委員会

第二二回海外史跡研修旅行 「イランの旅」を実施して

多摩学校 植田和秀

一、イランへの道

社会科部会歴史分科会海外史跡踏査委員会は、二〇〇〇年七月二十四日～八月七日まで一四泊一五日の日程で「イランの旅」を実施しました。この企画が立ち上がったのは一九九八年のことでした。二〇〇〇年実施の第二二回海外史跡研修旅行の計画を立案する際、イランでは前年の九七年に国民の圧倒的支持を得て大統領となったハタミ師が対外関係改善の動きを始めたため、ホメイニ師のイスラム革命以来遠い存在になっていたイランを訪れるなら、観光客がまだ少ないであろう今がチャンスと考え、イラン旅行に向けての計画検討が始まりました。

イランへはイラン航空が月・木の週二便、成田～テヘラン間を飛んでいます。月曜はテヘランへの直行便で所用一〇時間、木曜は北京経由で所用一四時間です。そのため旅行計画では往復とも直行便を利用し、出発は月曜発、帰国もテヘランを日曜夜に出る便を使うことにしました。旅行期間については、一週間ではテヘラン・イスファハン・ペルセポリスを含むシーラーズの三都市を中心とする行程しか立案できず、折角イランを訪れるのなら、シーア派最大の聖地マシャドをはじめ、イラク国境に近いチョガー・ザンビール(エ

ラム時代のジググラトで有名)やシューシユ(スサ)あるいはローリンソンの楔形文字解読のきっかけとなったベヒストゥーンさらにはハマダン(アケメネス朝の「夏の都」であったエクバタナ)などをぜひ見たいとのこと、二週間を設定する事になりました。イランは日本の約四・三倍の面積を持つ国ですからすべてを見るには二週間でも足りないのですが、効率よく旅行が出来るよう移動経路と利用交通機関の工夫に知恵を絞り、また気温が高く乾燥した場所を移動するため、参加者の健康管理の点からも見所の多いテヘラン・イスファハン・シーラーズでは連泊するよう配慮しました。その結果、完璧とは言えませんが、高校の教科書・資料集に掲載されている史跡のほとんどは網羅できたと自負しております。

二、イランにて

イランの主だった見所を全部見てやろうという欲張った計画の旅行であったため、そのすべてについて報告するのは限られた紙幅の中では難しいのですが、今回の旅行で訪れた史跡のうちイランが世界に誇る三つの世界遺産を中心に報告します。

(一) ペルセポリスとその周辺

ペルセポリスはシーラーズの北東六〇km、バスで約一時間のところにあるあまりにも有名な遺跡。前五二二年(前五一八年説もある)に、アケメネス(ハカーマニシュ)朝のダレイオス(ダーラヤワウ)一世が新年(ノウルーズ：注1)の祭儀等を行うため年間で九〇日だけ使うために建設を始めた都。アレクサンドロス大王がやって来たときもまだ建設途中であったという。

ペルセポリスの近くにはダレイオス一世をはじめとする四人のアケメネス朝の王の墓とササン朝のシャープール一世の騎馬戦勝図が

あることで有名なナグシェ・ロスタム（「ロスタムの絵」の意…注2）とキユロス二世がメディアを滅ぼした後、アケメネス朝の最初の都としたパサルガダエ（「ペルシア人の本営」の意）がある。

（二）イスファハーン

この町はザイヤンデ川に臨み、紀元前から栄えていた。一五九七年、サファヴィー朝のアッバース一世はこの町を首都と定めると、王みずからが都市計画を立案して壮大で美しい町を造りあげた。最盛期の一七世紀には人口七〇万を数え、「イスファハーンは世界の半分」（Esfahan Nest-e Jahan）と呼ばれた。市内には王宮に隣接して建設され、世界遺産に登録されているイマーム広場（王の広場）をはじめ、チェヘルソトウーン宮殿やアルメニア人居住区のジョルファ地区、ザイヤンデ川に架かるスィー・オ・セ橋など見所が多く、連泊したにも関わらず駆け足の見学になってしまったのが残念であった。

（三）チョガール・ザンビール、シュエシユ、ベヒストウーン、ハマダン

ペルセポリスとイスファハーンを見るだけであれば、いくつかの旅行社が企画している八日間の格安ツアーでも十分である。しかし、一般のツアーではなかなか足を延ばせないこれらの遺跡も巡るのが、今回の旅行の目玉の一つであった。

チョガール・ザンビールはアフズからバスで約一時間四五分のところにある世界遺産。いくつものテル（丘）が重なり合うように続く荒涼とした大地に、焼き煉瓦を積み上げたジググラトが屹立している。このジググラトは前一三世紀中頃、エラム王国（…注3）のウンタツシュガルがこの地を宗教中心地とするために建設したもので、完成当時は一辺一〇五m、高さ五〇mの五層の神殿であったという。しかし前六四〇年頃、アッシリアに破壊され、現在は高さ二

五m、二・五層部分のみが現存する。なお、チョガール・ザンビールの語源は「チョガール」＝「逆さま or 棗椰子を盛った様子」、「ザンビール」＝「菓の皿 or 物入れ」と言われている。

シュエシユは日本ではスサの名で知られている。この町はエラム王国の行政の中心として繁栄していたが、前六四〇年頃、チョガール・ザンビールとともにアッシリアに破壊された。その後、アケメネス朝のダレイオス一世がこの地を「行政の中心」と定めたため復興したが、前三三一年、アレクサンドロス大王の侵入で再び破壊された。遺跡の保存状態は良くなく、ダレイオス一世のアパダナ宮殿址も所々に僅かに残る柱の断片によってかつての栄華を偲ぶのみである。なお、アパダナ宮殿の奥にはエラム時代の町の跡があり、二〇世紀初頭にフランス考古学調査隊がここでハンムラビ法典を発掘した。

ベヒストウーン碑文はケルマンシャーの北三六km、バスで約五〇分の地点にあるダレイオス一世の戦勝記念碑。バビロンとエクバタナをつなぐ「王の道」の途上にあり、道行く旅人達に王の武勇伝を知らしめるため、そそり立つ岩壁の途中、高さ六六m地点に彫られている。しかし、残念なことに現在碑文は修復中で、碑文を囲むように組まれた鉄パイプに邪魔されて碑文を見ることは出来ない。

ハマダンは前六〇〇年頃にメディア王国の都エクバタナとして繁栄し、アケメネス朝の下でも「夏の都」として栄華の絶頂を極めた。町の中心から北へ一km程のところにある「エクバタナの丘」は、アケメネス朝からバルティア時代に発展した町の遺跡で、現在も発掘が続けられている。発掘が済んだ部分は、トタン屋根で覆われた下に鉄パイプの足場が生まれ、五m程下にある発掘された町並みを見られるようになっていた。

三、イランを訪れて思ったこと

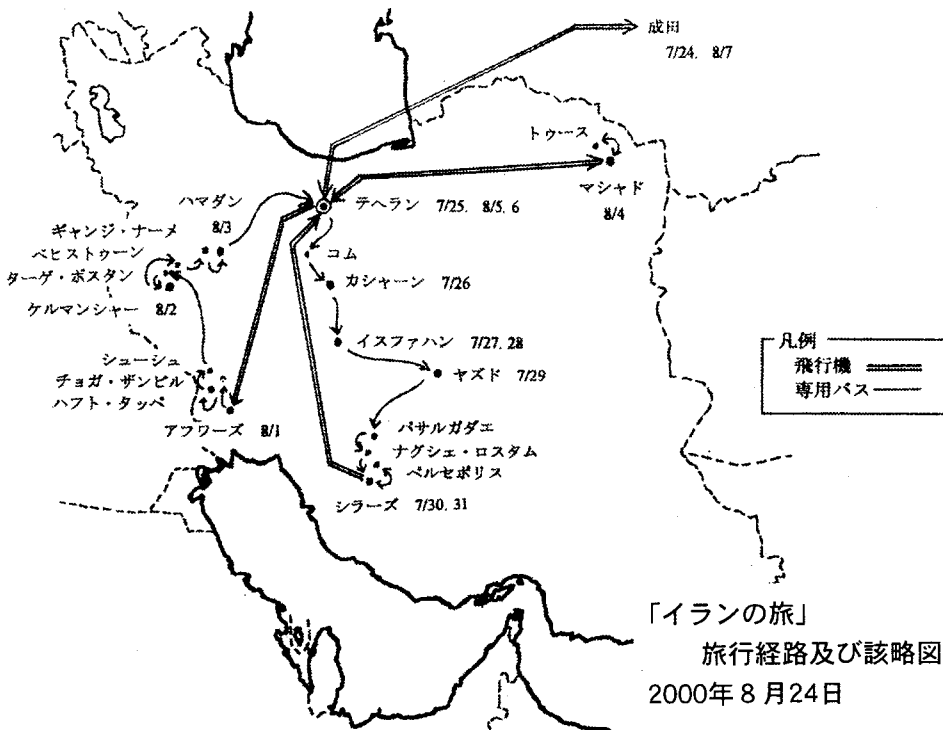
今回イランを訪れて強く印象づけられたことは、ハタミ大統領の下でイランが対外関係の改善を図り、懸命に経済的發展をめざしていることとする姿勢でした。もともと二週間という限られた旅行期間であり、イランの人々の日常生活に足を踏み入れた訳ではないので断定はできませんが、ハタミ大統領が登場してからかなり自由な雰囲気が生まれてきたようです。

イランではホメイニ革命前に三五二一万であった人口が一九九九年には六二二三万に増えており、若い世代に仕事を与えることが社会の安定のためには不可欠であると思います。私は一五年前に中国を訪れましたが、現在のイランはちょうど改革開放經濟を開始して間もない当時の中国の状況に似ていると思いました。

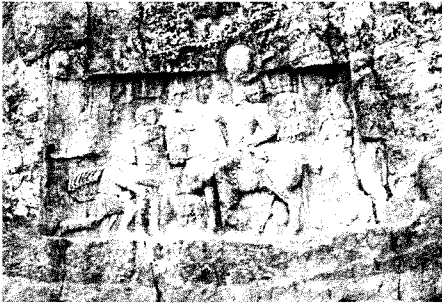
イランの国内情勢を巡っては、ハタミ大統領を中心とする改革派とハメネイ師を中心とする保守派の対立が報じられています。長期的な流れとしては改革の流れを阻止することは難しいでしょう。

注1：イランでは古来より春分の日の太陽が南中する瞬間を新年の始まりとしており、現在でも日常生活はイラン暦（ヒジュラ紀元の太陽暦で春分の日が元旦）を使用している。そのため二〇〇〇年七月二五日にイランに入国し、八月六日に出国した我々のパスポートには一三七九年五月四日と五月一六日のスタンプが押されている。（尚、ヒジュラ暦では一四二二年四月二三日と五月五日にあたる。）

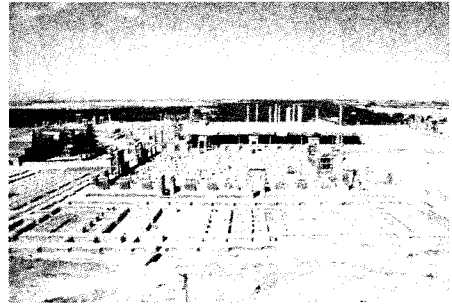
注2：ロスタムはフィルドゥウシーの『シャー・ナーメ（王の書）』に出てくる伝説の英雄



注3：エラム王国はメソポタミア文明の影響を受けたアケメネス朝に先行する王朝。エラム文明については、『世界の歴史4 オリエント世界の発展』（中央公論社一九九七年）に詳しい。



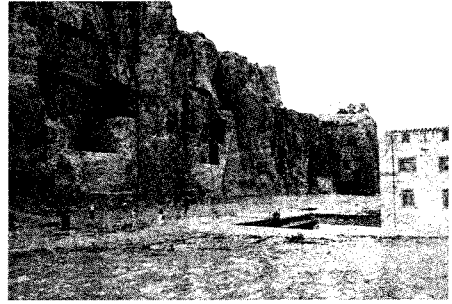
シャール1世騎馬戦勝図
(ナグシェ・ロスタム)



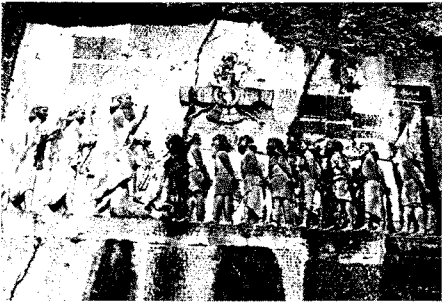
ペルセポリス



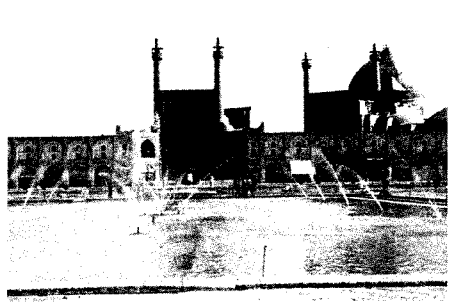
キュロス大王墓 (パサルガダエ)



アケメネス朝の王墓 (左側の崖の十字形の窪み)
(ナグシェ・ロスタム)



ベヒストゥーン碑文



イマーム広場「イマーム=モスク」
(イスファハン)



エクバタナの丘発掘風景 (ハマダン)



ジグラト (チョガー・ザンビール)